



# 覗く眼

第9回

源治は千餓村に着くや否や、事を実行に移す事にした。最初の訪問の時は交番を尋ねそこを拠り所にしたが、今回はそんな気持ちはさらさら無い。

それはそうだろう。源治は出発の時、沢井に対しこの村の警官田部の事を、名指しで批判している。沢井はあの警官の事を少しも疑っていないようだから抑えた言い方しかしていないが、源治の田部への不信はかなり深い。

源治は田部との会話の際、ぶっきらぼうに振舞いながらもその動き、喋り方などを細かく観察していた。

（この男、おかしい）

と感じたのは、目の焦点が時々合わなくなっているのを感じたからだ。この辺りの観察眼は長年の経験により培われたものだから、源治は絶対の自信を持っている。人は言葉や仕草に注意を払うことができても、目の動きはよほど訓練でもされて無い限り自由にする事はできない。田部がどういう意図や立場で源治たちの様子を窺っていたのかはわからないが、この大ベテランを相手にするには少々、荷が重過ぎた、と言わざるを得なかった。

源治が千餓村に着いた時、すっかり日は暮れていた。街灯もないこの村は、夜になれば一面の闇が広がり、所々にロウソクの炎のように家家の明りが灯るだけだ。

好都合だった。闇に乗じて、源治は思いを遂げる事ができる。目指す先は、あの痩せこけた体に包帯姿の顔、そこから覗く“人を殺すことのできる眼”の輝きを持つ男のいるであろう、佐倉家だった。

源治は佐倉家がこの村の名家である事を象徴するような高い塀を見上げ、大きく息を吐いた。この高い塀を越えるのは、少々骨が折れる仕事だ。

そう、今宵の源治はこの家に入り口からまともに訪ねようとはしていない。忍び込み、何か証拠を得ようという思惑だ。源治には目の前の塀が、何かを覆い隠すための壁にしか見えない。

見回すとおあつらえ向きに、背の高い板が転がっていた。縦に使って塀のでっぱりに手をかければ、何とかかなりそうな大きさだ。

源治は早速、実行に移す。体はずいぶんとくたびれてきたが、試してみれば何とかなる事が多いのももう、十分に知っている。

塀のでっぱりに指はうまくかかったものの、ここからは力技だ。源治はありたけの力を指と掌に込め、自らの体を持ち上げる。こんな時に小柄なのは、有利だ。源治は指が熱くなるほどのふんばりの末、いっきに自らの体を塀の上部にへばりつけた。そして鉄棒で前転するような要領で持ち上げ、その後はゆっくりと横倒しにして、塀の内側に落としていく。上手い具合に足先から落ちて、源治は尻もちさえつくこと無く自らの体を佐倉家の屋敷内に放り込むことに成功した。

けれども一瞬の安堵も束の間、目の前を眩い光が覆う。他の場所は、暗いままだ。明らかに源治の体を捉えた、スポットライトだった。案の定、そこには懐中電灯を掲げた使用人頭、八代の姿があった。

「これはこれは。刑事さんだと仰ってたのに、実は泥棒でしたか」

八代は皮肉たっぷりの言い回しをする。

「いや、おかしな奴がここに入って行った気がしてな」

こんなはったりが上手くいくとは、源治ももちろん思っていない。ごまかせたら目つけ物、といった類のものだ。

「まあ、それは大変なこと」

割ってはいた女の声は、まるで真剣味がなく、むしろ嘲笑っているかのよう。この村には似つかわしくない都会風の出で立ちをした、千鶴子だった。その格好は、夜であっても全く隙がない。まるで、来訪者を待ちうけていたかにも思える。

「やはりこの家に、殺人事件の犯人がいるのですかねえ」

八代は源治と千鶴子の顔を交互に見て、また皮肉たっぷりに言う。

源治は確信した。この連中は、源治が来るのをわかっていたのだ。

「そうですな。あの人影は、怪しかったですよ」

源治はもはやはったりにもならない嘘を貫きとおす。それは、遠回しな皮肉の応酬、いっぼう変わった罵り合いでしかない。

「さすがは名刑事さんね。胆が据わってらっしゃる」

高い笑い声を上げたのは、千鶴子だった。こうなれば狐と狸の化かし合いだとばかりに、源治もますます覚悟を決めた。

「ご案内しますよ」

けれども腹の探り合いは、八代の一言により呆気なく終わりを告げた。いやそもそもこの家の二人には、化かし合いをする気など無かったのかもしれない。ではこれまでの何だったのかと言えば、単なる余興に過ぎない。何しろ自分たちの庭に入り込んで来た獲物なのだ。この二人は源治をどうするかまでを決めているのだろう。

「どうぞ、こちらへ」

八代が屋敷の方へ、明りを向けた。闇を背景にして浮かび上がる屋敷は、不気味な姿に思える。源治は身を固くした。いくら強靱な意志と豊富な経験があるといえ、敵が何らかの罠を張る場所に進んで行くのは気が引ける。

「さあ、参りましょう」

源治の体が背後からの女の声に、ピクリと反応した。いつの間にか千鶴子は、源治の後ろ側に回っていたのだ。

前には八代、後ろには千鶴子。年寄りと女だ。前門の虎、後門の狼といった諺には程遠い。けれどもこの非力なはずの二人には、何らかの策略があるはずだ。また不可思議な事に、妙な威圧感さえ漂って来る。

「さあ」

「お、おうよ」

千鶴子の声に急かされるように、源治は歩き出した。八代の懐中電灯により照らされた屋敷の姿が大きくなるごとに、源治は動悸がひどくなっていくのを感じ、悟られぬよう落ち着かせるのに、心を砕きながら歩を進めた。